



## 大図研京都ワンディセミナーのご案内

### 体験！「問題解決型ファシリテーター入門」

日 時：平成 28 年 12 月 11 日（日） 13:00－17:00

会 場：キャンパスプラザ京都

講 師：北村志麻 氏 図書館パートナーズ 代表

参加費：会員無料 非会員 500 円

定 員：40 人

申込については、追って京都地域グループ web サイトでご案内させていただきます。

#### [目 次]

大図研京都ワンディセミナーのご案内	…	1
小特集：大図研京都ワンディセミナー「つながる図書館・ささえあう図書館－公共図書館から見た大学図書館の世界」参加報告		
大学図書館と公共図書館－互いに学び高め合う関係	谷口 由佳	… 2
大学と公共、お互いに学び合える	是住 久美子	… 4
小特集：大図研オープンカレッジ「大学図書館の最新トピック学びなおし」参加報告		
「障害者差別解消法の大学における対応のポイント」を学んで	河野 由香里	… 6
井村邦博氏「成果物のメタデータ定義と名寄せの状況」の講演について	大西 賢人	… 7
オープンカレッジ「佛教大学図書館における Summon2.0 と図書館ポータルサイト BIRD」参加報告	西菌 由依	… 10
会費納入のお願い	…	12

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：[kyoto@daitoken.com](mailto:kyoto@daitoken.com) （大学図書館問題研究会京都地域グループ）

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

---

**小特集:大図研京都ワンディセミナー****「つながる図書館・ささえあう図書館—公共図書館から見た大学図書館の世界」参加報告****大学図書館と公共図書館—互いに学び高め合う関係****谷口 由佳**

---

2016年6月19日(日)、キャンパスプラザ京都で開催された大図研京都ワンディセミナー「つながる図書館・ささえあう図書館—公共図書館から見た大学図書館の世界」に参加させていただきました。本稿では、講師の岡本真氏のご講演の内容をご紹介します。

本題に入る前に一つ、私の苦い経験を述べさせてください。私は現在勤めている大学図書館以外での勤務経験がなく、機会があれば近畿地方やそれ以外の大学図書館を訪問するよう努めてきました。まだまだ不勉強ながら、深い井戸の内壁を二、三寸這い登った蛙ほどには視野を広げてきているつもりでした。

しかし先日、久々に近隣の公共図書館に行った日のこと。リニューアルオープンしたばかりの館で、正面玄関を入れてすぐに入館ゲートが設置されています。ここで、大学図書館とは違い「利用者カードを持っていないでもそのまま図書館に入れること」に驚き、次いで自分が「利用者カードを持っていないと図書館に入れない、と思いこんでいたこと」に驚いたのです。「大学図書館を見て図書館を見ず」を自覚した瞬間でした。

今回のワンディセミナー「公共図書館から見た大学図書館」というテーマを伺って、真っ先にこの時の反省が思い起こされ、喜んで参加させていただいた次第です。

講師の岡本真氏は数多くの図書館コンサルティングを手掛けてきたアカデミック・リソース・ガイド(ARG)株式会社の代表で、それ以前からも編集者、ヤフー株式会社勤務など図書館や情報、科学技術に関わるお仕事を経験され、他にも saveMLAK プロジェクトや図書館総合展運営委員会など幅広い企画の中核に携わっておいでの方です。そこからの豊富な知識と経験を基に、明快な論理と直截な語り口でお話してくださいました。

まず公共図書館をめぐる最近の状況として、公共施設の再編・再整備、人口減少による財源減少、災害対策などの背景が語られました。近年、図書館が新たな「まちづくり」の中核として注目されつつある理由がこれまで今一つ理解できていなかったのですが、「公共図書館の図書貸出期間は基本的に2週間なので、利用者が月に2回は来館することになる。他の文化施設にはないこの来館頻度に見合う施設やサービスを組み込んでいけば役に立つし、無料という魅力もあるので人が来るのも自明である」というお話には頷かされました。

また、災害復興における文化復興の重要性にも理解が広がってきたこと、市民からは図書館のにぎわい・つながりの側面だけでなく情報・知識の側面も明確に重んじられていることなども印象深かったです。

それから2015年の注目すべき公共図書館開館事例として富山市立図書館本館(Toyamaキラリ)と岐阜市立中央図書館(ぎふメディアコスモス)が紹介され、さらに2016年以降の事例としては瀬戸内市市民図書館や沖縄市立図書館なども挙げられました。銀行が出資して図書館・美術館を誘致したToyamaキラリ、経営不振の商業施

設と統合した沖縄市立図書館などは、図書館と民間が互いの本分を活かしながら共存共栄を図るモデルケースとして興味深く感じました。

ここまでのお話を受けて、では公共図書館と大学図書館ではどちらが先を行っているか？という会場への問いかけがあったのですが、私は「評価軸は図書館の三要素だろうか、しかしそもそも意義や利用者層に違いが…」といったことしか考えられませんでした。しかしそこから、「協創の場」「にぎやかな場」「MLAK 連携の場」「課題発見・解決の場」という4つの切り口で見ると公共図書館にとって大学図書館はどう映っているのか、一方がどう先行していて他方がどう学ぶべきか、という大変興味深い議論が展開されました。

この中では特に「課題発見・解決の場としての図書館」というテーマに関心があったのですが、「課題解決以前に地域ごとの課題の発見が必要である」「人によるアプローチは人の異動で終わる」という2点の重要性を痛感させられました。

私が入職した年に参加した大学図書館近畿イニシアティブ初任者研修で、「大学図書館の職員は図書館への帰属意識が強いが、それ以前に大学に属する職員であることを自覚しなければならない」という趣旨のお話を伺ったことがあります。大学図書館には大学の取り組みや方針、経営状態が密接に関わってくるのと同様、公共図書館では地方の状況や特色を組み込まなければならないのは自明のことなのですが、どちらにおいても職員の「図書館」への帰属意識が却って視野を狭めているのかも知れないという点は、日々注意していなければならないと思われました。また、図書館の支援は蔵書構築に尽きる、というお言葉から、「ライティング支援など属人性の高いサービスも、個々人の努力や研修体制で提供し、引き継いでいくべき」という考え方について再考させられました。

質疑応答では、私から「人的サービスと違い蔵書（コレクション）は時代を超えて残るとのお話だったが、蔵書構築能力にも属人性がある。その問題は公共図書館にも共通するのか、だとすれば解決の手立てはあるのか」という趣旨の質問をし、「継承については職員の熱意や関心が左右するところが大きいですが、仕事を人につけるのではなく、なるべく早くドキュメンテーションすることで組織につけるべきである。労働量が過大になるのであればそこを民間にアウトソーシングした方が双方のためにいい」という大変参考になるご回答をいただきました。

他の方からの、「講演で挙げたカフェ、コワーキングなど5つの「特徴的機能」も含め、公共図書館に携わる立場で大学図書館に求めるものは何か」というご質問への、「圧力に負けないこと」「内部からの企画・提案を大事にすること」「トレンドに追い付くのも大事だが、うちの大学だからこそ、という新しいモデルを自ら創ってほしい」というご回答は、一つ一つ肝に銘じるべきものだと感じました。

今の大学図書館はつまらない、国の政策に翻弄された「つまみ食い」しかしていないために画一的になっている、というご指摘は大変耳が痛かったです。

結びに置かれた「これから大学図書館は冬の時代に入るが、悪いことばかりではない。大学の増えすぎは是正する必要があるし、小中学校に比べれば統廃合の動きも穏やかなもの。これから発展するか潰れるか、意義を問い直すチャンスと捉えられるのではないか」というお言葉までは普段考えていることと一致していましたが、「これから他の館種の図書館へ未来のモデルを提示することもできる。そこまでのソフトランディングを楽しむのも面白いはずだ」という前向きで視野の広いお考えは私にないものでした。

冬来たりなば春遠からじ、ただ春は待つものではなく招くものである。といったところかも知れません。

今回のセミナーにも大勢の方が参加なさっていて、これだけの方が図書館全体という広い視野での向学心や問題意識をお持ちなのだなと心強く思えました。日々の業務に追われているとどうしても近視眼的になりがちですが、近くに活かすためにこそ遠くの事例から積極的に学ぶことの必要性を改めて痛感しました。

講師の岡本氏と、このような貴重なセミナーを開催して下さった大図研京都支部の皆様、この場をお借りして御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

たにぐち ゆか (神戸大学附属図書館)

---

## 小特集:大図研京都ワンディセミナー 「つながる図書館・ささえあう図書館－公共図書館から見た大学図書館の世界」参加報告

### 大学と公共、お互いに学び合える

是住 久美子

---

2016年6月19日(日)、キャンパスプラザ京都で開催された大図研京都ワンディセミナー「つながる図書館・ささえあう図書館－公共図書館から見た大学図書館の世界」に参加しました。私は公共図書館で働く職員の立場から、このセミナーに参加した感想を述べたいと思います。

講師の岡本真氏は、『未来の図書館、はじめませんか?』(青弓社)や季刊誌『ライブラリー・リソース・ガイド(LRG)』の出版だけでなく、数多くの公共図書館プロジェクトに関わってこられ、日本全国の数多くの図書館にも足を運んで見ている、いわば、「日本の公共図書館を最もよく知っている人物」と言っても過言ではないと私は考えています。その岡本氏が大学図書館職員向けの研修会でどのようなことを話されるのか興味がありましたし、全国の公共図書館の最新情報をコンパクトに整理して説明してもらえそうだという期待から、今回のセミナーに参加しました。

最近、図書館関連の本が売れているそうです。なぜかという、全国的に再整備の時期を迎えている公共施設の状況や、人口減少による財源不足の中、賑わいやつながりを創出する施設としての図書館への期待など、公共図書館への社会的な注目が集まっている背景があるからという説明がありました。また、ここ数年で、新たに建築された公共図書館の中には注目すべき事例が複数あり、例えば、富山市立図書館(TOYAMA キラリ)や岐阜市立中央図書館(ぎふメディアコスモス)、最近開館したばかりの瀬戸内市民図書館などの複合施設の紹介がありました。

自治体の財源不足の中、公共図書館を自治体独自で運営するのが難しくなった場合、大学図書館が運営の協力を行うケースが出てきているそうです。すでに今年4月に、箕面市がこれから整備する市立文化交流施設及び図書館について、大阪大学がその管理運営を将来にわたり無償で請け負うとの合意書を締結した事例も紹介され、これには驚かされました。18歳人口が減り続ける中、大学側も存続をかけて様々な戦略を立てているようですが、総合大学でもある大阪大学にはどのようなメリットがあると考え合意書を締結したのかとても気

になりました。

公共図書館からみた大学図書館として注目すべき4つのポイントの一つ目として「協創の場としての図書館」が挙げられました。この観点では、大学図書館が先行して導入しているラーニングコモンズの事例があります。公共図書館では、仙台市、安城市が全国に先駆けて公共図書館でのラーニングコモンズとして設置される予定であることが紹介されました。私も公共図書館にこそ、ラーニングコモンズのような場所があるべきだと考えていて、勤務する京都府立図書館において、ラーニングコモンズやコラーニング、フューチャーセンターの要素を含めた場を作ることを目指し、サービス計画中にも「知的な創造の場の創設」という文言が盛り込まれています。そのようなこともあり、大学図書館のラーニングコモンズは先行事例として参考にしています。公共図書館版のラーニングコモンズを考えた場合、単純にハード面を整えるだけでは、単なる自習室になってしまい、本来の目的である、多様な人たちが集まり対話や議論を行う場所として機能することは難しいと考えています。この点で大学図書館のラーニングコモンズで行われているソフト面でのサービスに着目しています。

最後に「未来の図書館」としての公共図書館としていくつかの特徴的な機能が紹介されました。よく聞かれる「カフェ」の他にも、「スタジオ」や「ファブラボ」といった機能では、図書館にキッチンスタジオや3Dプリンターなどいろんな設備を整え、それらを利用者が自由に使って、様々な活動ができるという、海外の公共図書館で実施されていることが日本の図書館でも導入するところが出てきているようです。また、「編集局」の機能として、コミュニティFMやWikipedia Town等の事例が紹介されました。コミュニティFMは、災害時の役割も大きく、必要な人へ必要な情報を届けるという面でも図書館とも親和性が高いと感じました。また、紹介されたWikipedia Townについては、私も京都で活動を行っていますが、地域の情報をその地域の人たちがWikipediaに編集し、世界に向けて発信するという活動です。お互いに学び合うコラーニングの要素があり、また、編集の際に図書館の郷土資料を参照するなど、図書館の資料活用の面でも優れた取り組みだと感じています。公共図書館は多様な年代の、様々なバックグラウンドを持つ人たちが集まる場所です。そういった人たちがお互いに学び合いながら新しい価値あるものを生み出していく活動を公共図書館は支援していくべきだと考えています。地域にいる様々なバックグラウンドを持つ人の中には、当然、大学生、大学院生も含まれ、地域社会に大きな影響力を持つ存在です。公共図書館で大学生、大学院生が多様な人との協創を通じて多くのことを学び、その成果を社会に還元していく活動に大学図書館の方々も興味を持っていただき、大学図書館と公共図書館の連携がもっと進むと良いと思います。

今回のセミナーに参加して、大学図書館と公共図書館、それぞれがどんなことを行っているか、お互いに知る機会は意外と少ないのだと気付きました。これまで、公共図書館の立場からは大学図書館で取り組んでいることが参考になるという認識はありましたが、その逆の公共図書館の事例が大学図書館にとって参考になりうるという認識はありませんでした。今回のセミナーでは大学図書館の職員の方々が公共図書館の取り組みに対して興味を持って聞いておられたことが大変印象的でした。

これぞみ くみこ (京都府立図書館)

---

小特集:大図研オープンカレッジ  
「大学図書館の最新トピック学びなおし」参加報告

「障害者差別解消法の大学における対応のポイント」を学んで

河野 由香里

---

2016年7月2日、キャンパスプラザ京都にて、大学図書館問題研究会オープンカレッジ「大学図書館の最新トピック学びなおし」が開催されました。障害者サービス、メタデータと名寄せ、ディスカバリーサービスという3つの最新トピックについて、それぞれのスペシャリストからお話を伺い、学びなおしができるという大変魅力的な機会でした。本稿はそのうちのひとつ、京都大学障害学生支援ルーム助教の村田淳氏からご講演いただいた「障害者差別解消法の大学における対応のポイント」についての参加報告です。

### 1. “障害”の現在

障害とは何か。講演のはじめに障害者基本法における障害の定義として「障害者」「社会的障壁」の説明があり、個人が持つ障害そのものだけでなく、日常生活又は社会生活を営む上で出てくる「社会的障壁」も障害として定義されていることが説明されました。

また日本が2007年に署名し、2014年に批准した障害者権利条約についても触れられました。この条約で明記された「合理的配慮の提供」の確保は、ここ最近の日本の高等教育界でも注目を浴びているキーワードだと思います。批准に向けた日本国内における法政策の動向など、その辺りの背景知識を基本から確認することができました。

個人的に印象に残っているのは、合理的配慮という言葉が与える「印象」についての話です。日本語の「配慮」には、やってあげる、やってもらう等、一方向のイメージがあるが、それとは対比的に、合理的配慮の原語である *reasonable accommodation* の”*accommodation*”は、双方向で柔軟なイメージを持っているそうです。利用者・大学（図書館）間の調整が、双方向かつ柔軟に行われるよう意識することは、障害の有無に関わらず、日頃から忘れてはならない視点であると感じました。

### 2. 大学における障害学生支援と障害者差別解消法

冒頭でまず、大学において障害のある学生の数が年々増加傾向にあることが示されました。ただし、高等教育を受けている人全体からみた障害のある学生の割合は、欧米諸国と比べると日本はかなり少ない数値であるそうです。

続いて障害のある学生の修学支援に関する検討会（文科省）、そして2016年4月に施行された障害者差別解消法について説明がありました。今回参加された方の中には、所属大学が策定した「対応要領」を既に確認済み、という方も多かったのではないのでしょうか。「法的義務」「努力義務」といった、最近耳にすることが多くなってきたキーワードも多く登場し、法律の概要についてわかりやすくご説明いただきました。

村田氏のお話にもありましたが、障害学生支援はいまや「特別なこと」から「当り前のこと」に変わってきています。障害の有無に関わらず、学生が本質的に持っている「教育を受ける権利」を保障するため、大学全体で必要な取組みを検討すること、また図書館としても主体的な姿勢で支援の枠組みに入っていく必要性を感じました。

### 3. 京都大学における支援体制

京都大学における支援体制として、障害学生支援ルームの紹介がありました。障害学生支援ルームとは、障害があるなどの理由により、修学上様々な悩みや相談ごとをかかえる学生への支援を行うことを目的として設置されている組織だそうです。支援の内容例として、ガイドヘルプ、対面朗読、ノートテイク、移動介助、学習補助者の設置、支援物品の貸出などなど、様々な種別の支援を実施されていることがわかりました。また人的支援は主に学生サポーターが担当しており、学生は障害に応じた養成講座を受講すること、ボランティアではなく基本的にすべて有償なこと等、実例を伺うことができました。

今後の課題として、支援体制の強化、学区制や教職員を対象とした理解啓発活動の強化、障害者差別解消法に基づく具体的な対応等を挙げられていましたが、これは今多くの大学が共通に抱えている課題であると思います。

#### 4.終わりに

全体を振り返ってみると、村田氏のご講演はとてもわかりやすく、今障害者サービスについて学び始めようとしている自身にとって、まさに願ったり適ったりの内容でした。

最後になりますが、この度は他支部からの参加をお認めくださり誠にありがとうございました。私が以前京都を訪れたのは10年以上前、高校の修学旅行の時であったと記憶しています。遠く北海道におりますと、他支部のイベントに中々参加できないのですが、一念発起して今回のオープンカレッジに参加したことで、最新のトピックスを学ぶことができ、またご参加されたみなさまと交流を深めることも叶うなど、とても有意義な一日でした。

大図研京都支部のみなさまに改めて感謝申し上げます。貴重な機会をありがとうございました。

この ゆかり (北海道大学附属図書館)

---

### 小特集:大図研オープンカレッジ 「大学図書館の最新トピック学びなおし」参加報告

#### 井村邦博氏「成果物のメタデータ定義と名寄せの状況」の講演について

大西 賢人

---

2016年7月2日に開催された大学図書館問題研究会オープンカレッジ「大学図書館の最新トピック学びなおし」2コマ目は、株式会社アイキュームの井村邦博氏による「成果物のメタデータ定義と名寄せの状況」である。井村氏はOPACやメタデータ管理システムなど大学図書館システムの開発・導入業務に長らく携わってこられ、現在はDrupalによる図書館ホームページやデジタルアーカイブシステムの構築などに力を注がれている。本講演では、メタデータ設計の進め方や名寄せの概要と、KAKENとJAIRO Cloudの論文情報の名寄せ結果について紹介があった。

はじめに、メタデータ定義の流れにそって、設計のポイントとなる項目について説明があった。(1)「対象データの洗い出し」では、対象データの内容、公開の可否、オリジナル性、件数、将来の差分更新の発生の有無など対象データの確認をおこなう。(2)「メタデータ設計(定義)」では、実績のある世界で流通しているメタデータ定義を流用

すること、項目（フィールド）の型を意識して、すべての項目がもれなく適切な項目名で表現されていること、実際の値と正規化した値を分けて定義することや、固定 ID の付与、将来の拡張性について考慮することが重要である。(3)「設計（定義）したメタデータに対応したデータ整備」では、フィールド定義にそって全件データの確認をおこない、西暦・和暦・年月日などデータの各項目の統一、繰り返し入力データの分割、データクリーニングやエンリッチメントをおこなう。(4)「データ登録」では、全件データの登録や想定外の値に対するエラー対応を準備する。この際、登録に要する時間や再実行の手順の確認、差分更新や語彙化しているマスターデータ（コード値とデコード）との連携についても考慮する。(5)「データ公開」時には、どういう表示・検索をするのかを明確にすること、またデータ修正方法や再公開の流れ、アクセス統計についても考慮することが重要になる。また、(6)「外部との連携」では、各レコードの ID とパーマリンク、OpenSearch や OpenURL などの API 連携、OAI-PMH や ResourceSync などのデータ交換方法のほか、連携・交換時のデータフォーマット（CSV、XML）についても事前に検討しておくことが必要である。

続いて、KAKEN と JAIRO Cloud で公開されている論文情報を用いたメタデータ設計と名寄せの検証結果について紹介があった。

国内の研究助成された成果のオープンアクセス化の推進を目的として、KAKEN、JAIRO Cloud の論文情報のメタデータを OpenAIRE (Open Access Infrastructure for Research in Europe) の定義にマッピングする作業をおこなった。メタデータ定義では、contributor、creator のどちらを利用するか、1 つのデータに ISBN と ISSN が両方含まれているような場合に属性+値というように汎用性が高い定義方法では検索に問題があることなどが苦勞した点としてあげられた。データ整備では、件数や差分更新の可能性を考慮して整備はおこなわなかったが、すべての項目がマッピングできたため整備の重要度が低かったという。データ登録では、検索範囲の指定やソートなどで使用するため年月日の正規化をおこない、同時にオリジナル値についても正規化の値とは別に登録したこと、データ情報源の判別がおこなえるようにしたこと、将来的に外部ソースとマッチングできるような処理を想定したことなどが紹介された。講演当時は、データ公開と外部との連携については未実施だったが、名寄せした結果のメタデータを KAKEN で表示させ JAIRO Cloud へのリンク表示をすることや、固定 ID や DOI の付与、API 連携、海外助成機関とのデータ交換、JSON によるデータ提供などを想定されているということであった。

次に KAKEN と JAIRO Cloud の論文情報の名寄せの検証結果について紹介があった。

まず、名寄せの概要として、タイトルの誤入力など間違っただけのデータが間違っただけで名寄せされる場合があること、データを特定する ID が正しいと名寄せの精度があがるが、異なる項目が含まれていた場合にどちらの項目が正しいかについては別の角度からの判定が必要であることが指摘された。さらに、名寄せ結果は、データが大量であればあるほど総合的に評価することは難しく、アルゴリズムの変更、前処理の変更や他のデータとのマッチングなど別の角度から名寄せして、正しさを評価することや、部分的に人による判断を組み入れていくことも必要ということである。

今回の KAKEN と JAIRO Cloud の検証では、様々なデータソースからなる重複している論文のメタデータを同定して 1 つにする「書誌名寄せ」と、様々な形で記述されている氏名から、研究者を同定して 1 つにする「研究者名寄せ」の 2 種類の名寄せがおこなわれた。

書誌名寄せについては、入力されている DOI が間違っている場合があること、DOI の入力方法に揺れがあること、2013 年より前の過去のデータには DOI が付与されていないことが多いことなどから、全体の 50% 以下しか名寄せができなかったということである。



ある。そのため、DOI だけでなく論文タイトルや著者名も用いた同定処理や、同定できた論文の精度などの状況をみながら性能向上を試行中とのことである。書誌名寄せが実現すれば、KAKEN から機関リポジトリへのリンクが表示されることで、オープンアクセスの論文へのアクセスポイントが向上すること、論文情報のデータがクリーニングされ、検索精度の向上や検索でヒットしやすくなることがメリットとしてあげられる。

研究者名寄せについては検証の結果、共著者など複数の著者が 1 本書で記述されている、姓名の逆転、英語名、イニシャル表記、旧姓、所属や ID つきの著者名など、表記の揺れが多いことがわかった。また、著者 ID による同定については、KAKEN、JAIRO Cloud の論文情報には著者 ID がほとんど付与されていない。ただし、KAKEN に研究課題がある研究者には、KAKEN(e-Rad)の ID が付与されていることが多いため、論文情報から研究者を抽出して、研究課題の研究者に同定して論文情報に ID を付与することも可能ということである。研究者名寄せが実現すれば、所属変遷や項目が充実するほか、論文一覧の自動作成も可能となる。

最後に、名寄せの課題として、コンピュータによる機械的な処理により名寄せが可能になったが、100%の精度は実現できないためその場合の対応を考えること、データの種類に対応した最適な処理を見つけて、個々に対応していく必要があることが指摘された。ただし、インターネットの普及により、世界中でボーダレスに相互にデータ交換が可能となり、メタデータ定義の共通化が重要になったが、今後はデータ交換ではなく、リンク (Linked Open Data、以下 LOD) に変わること、URL 自体が ID として利用され、その ID の信頼性が高くなり、名寄せの必要がなくなるかもしれないという指摘で講演はしめくくられた。

筆者が名寄せという言葉をはじめて身近に感じたのは機関リポジトリの担当をしていた頃である。各機関で構築された機関リポジトリ (IR) のメタデータが学術機関リポジトリデータベース IRDB にハーベストされ、さらに IRDB を通した IR・CiNii 連携により、論文のレコードについては CiNii Articles から各 IR に自動的にリンクが表示されるという仕組みが実装された。NDL の雑誌記事索引に収録されていない論文についても各 IR に入力すれば CiNii Articles から検索可能になることに当時は衝撃を覚えたが、それとは別に、雑誌記事索引に収録済みの論文については NDL 経由のレコードと IR 経由のレコードが CiNii 上で名寄せされることで、メタデータが相互補完され IR では入力していない件名などでも検索が可能になったことも記憶に残っている。ただ、たまにメタデータの項目や記述の仕方の違いによりうまく名寄せされず、メタデータの設計や定義の重要性をあらためて痛感することにもなった。機関リポジトリに象徴されるように、大学図書館であつかう学術情報のメタデータのデータソースは多様化し、電子ジャーナルや電子ブックといった学術資料にしめるデジタルコンテンツの割合も増加している。これらデジタルコンテンツのアクセシビリティや可視性を向上させるための方策のひとつとして、大学図書館が作成してきた紙媒体の書誌情報やメタデータをデジタルコンテンツのアクセスポイントとして活用することが考えられ、今後名寄せはますます重要になってくるのではないだろうか。

また、研究者の名寄せについては、KAKEN と JAIRO Cloud の論文情報のみ対象ということだが、その結果は Researchmap、ORCID(Open Researcher and Contributor ID)、NACSIS-CAT 著者名典拠など様々な ID とつながる可能性をもっている。データ交換であれ、LOD であれ、他のデータとつなげることができる ID を保持しているということが今後のメタデータでは重要になってくるのではないだろうか。ぜひ、今回の検証結果が KAKEN や外部連携といった形で公開されることを期待している。

おおにし まさと (京都大学附属図書館)

---

小特集:大図研オープンカレッジ  
「大学図書館の最新トピック学びなおし」参加報告

オープンカレッジ  
「佛教大学図書館における Summon2.0 と図書館ポータルサイト BIRD」参加報告

西 蘭 由 依

---

ディスカバリーサービスは、2011年4月の佛教大学図書館による Summon の導入を皮切りに、国内の大学等の中で着実に普及が進んできた。この間、先行機関を中心にディスカバリーサービスに関する知見や経験、課題の共有が活発に行われ、ディスカバリーサービスをめぐる議論は、大学図書館全体に関わるさまざまな論点を包含しながら隆盛を見せている。そんな中、7月2日に開催されたオープンカレッジにおいて、今日の大学図書館の重要トピックの一つとしてディスカバリーサービスが取り上げられ、日本における第一人者である佛教大学図書館の飯野勝則氏より、最新情報の提供ならびに事例の報告が行われた。以下に、参加報告として講演内容の概要を紹介する。

(1)佛教大学図書館で2015年4月より運用を開始した Summon2.0 の特徴と課題

まず、議論の前提となる定義の確認がなされた。飯野氏は、いわゆる“BIG4”と呼ばれるディスカバリーサービス (ProQuest 社の Summon および Primo Central、EBSCO 社の EBSCO Discovery Service、OCLC の WorldCat Discovery Services) をウェブスケールディスカバリーとして扱い、スケール概念の重要性を強調する。これは単に、図書館が扱う情報資源の規模が、単一機関規模 (インスティテュションスケール) にとどまらず、ウェブ上のあらゆる情報資源を網羅する規模 (ウェブスケール) へ拡大していることを指しているのではない。機関・(コンソーシアム加盟館のような) グループ・ウェブといったように、ウェブスケールを最大値としながら利用者の求めるスケールで情報資源を可変的に扱えることがウェブスケールディスカバリーの最大の特徴だとする。

Summon は2013年3月に、新機能の提供とインターフェースの刷新を伴うメジャーアップデート (“Summon 2.0”) が発表され、導入機関での反映が順次行われた。講演では、このメジャーアップデートの技術的側面に焦点をあててその特徴が説明された。Summon 2.0 では Google 同様、AngularJS と呼ばれる JavaScript のフレームワーク (アプリケーションの標準的な骨組みを提供するコードのパッケージ) を採用しており、システムとユーザーインターフェース (以下、UI) を分離した形でのアプリケーション設計が可能となった。すなわち、Summon1.0 ではシステムの一部として UI があったが、Summon2.0 ではシステムと UI とが対等に存立している。飯野氏は、システム側と UI 側のそれぞれが自身の開発に注力できる環境が整えられたことは、ベンダーが UI の向上を重視していることを意味していると解き、今後ユーザーが得るであろうメリットへの期待を示した。

続いて AngularJS の特性を生かした Summon2.0 のカスタマイズ例として、日外アソシエーツ Book API やジャパナレッジ API の実装が紹介されたが、一方で、画面遷移のログを取得できないことや、パラメータ解析にかかるコストといった課題についての指摘もなされた。

(2)Summon2.0 を核としてリリースされた佛教大学図書館のポータルサイト BIRD について、そのコンセプトと利用者への影響

次いで、図書館ポータルサイトの構築に関する事例報告が行われた。ポータルサイトは、佛教大学図書館で提供するさまざまな情報（学術情報から広報的情報まで）を集約的に提供することを目的とし、初代の構築以降数度のリプレースを経て、現行は5代目にあたる。各代におけるコンセプトや苦労話も語られ、改善を重ねてきた様子が見て取れた。検索エンジンとして4代目で **Summon1.0** を、5代目で **Summon2.0** を採用している。2015年3月に公開された5代目では、愛称設定やサブドメイン取得によるブランディング戦略が取られるとともに、ポータルサイト・OPAC・ディスカバリーサービス・機関リポジトリのデザイン共通化によるポータルサイトの位置付け強化が図られている。

利用者からの反応はよく、ポータルサイトのアクセス回数、ならびにディスカバリーサービスの検索回数の統計によると、2014年度から2015年度の増加率はそれぞれ、39%、56%と非常に高い数値を示している。一見大成功を収めているように思われるが、課題も示された。講演のはじめにスケール概念について触れられたが、さまざまな情報資源が一体的に提供されることで、ウェブスケールのコンテンツに関する不具合であっても、利用者からは機関の問題であるように見え（飯野氏の表現によれば「スケールの錯視」）、図書館に対して迅速な問題解消を求める。これはポータルサイトのコンセプトや普及が進んだことに由来する課題とも言え、飯野氏からは、利用者の図書館への期待値が高まっていると捉えて応えていきたいとの意気込みが示された。

質疑応答では、スケーラビリティに関して個人レベルへの拡張の可能性、ポータルサイト構築にあたっての人的体制、2015年10月に行われた ProQuest 社による Ex Libris 社買収が **Summon** と **Primo Central** の今後の展開に与える影響、学内で作成されたデータベースのディスカバリーサービスにおける望ましい展開のあり方、等々、活発な意見交換が行われた。個人的には特に、学内発のデータベースをディスカバリーサービスにより学外へ展開させるには、コンテンツプロバイダーを目指すよりも、国立国会図書館サーチを経由させることで、システムベンダーを問わず広く展開がなされる方向性を目指すのがよいのでは、との見解が大変参考になった。

今回の参加をとおして、最新情報の入手はもちろん、Web サービス全体の関係性も整理しながら、情報資源が最大限に活用されるよう取り組みを続ける姿勢等、学ぶところが多かった。本学では2013年3月に **Summon** を導入し、以来、利用者の間における一定の定着は見ているが、一層の普及と活用を目指しているところであり、今回得られたことも参考にしながら取り組んでいきたい。

にしぞの ゆい（鹿児島大学附属図書館）

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

2016/2017年度(2016年7月～2017年6月)より、大学図書館問題研究会会費は、すべての会員の皆さまに、直接大学図書館問題研究会事務局へご納入いただくこととなりました。

また、地域グループ(従来の支部)に所蔵される方は、地域グループ費と合わせてご納入いただくことになっています。

**会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都地域グループ費：¥2,000)です。**

**【振込先】**

郵便局 00190-2-79769 大学図書館問題研究会

■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900 ■店番 019

■預金種目 当座 ■店名 〇一九(ゼロイチキューウ店) ■口座番号 0079769

ご不明な点は大学図書館問題研究会事務局(会費担当)(kaihi@daitoken.com)まで。

※ 学生会員制度(試行)として、学生の方には特典をお渡ししております。

詳細は京都地域グループ Web サイトの「学生会員制度の試行について」をご覧ください。